

中島榮章 著

『大航海時代の海域アジアと琉球』

——レキオスを求めて——

中 砂 明 徳

著者は明代の地域社会史について大きな業績を挙げる（『明代郷村の紛争と秩序——徽州文書を史料として』汲古書院、二〇〇二）一方で、近年では特に東アジア海域史研究に力を入れ、次々と論文（英語論文も含む）を公開するだけでなく、共同研究の成果として『寧波と博多』（伊藤幸司氏との共編、汲古書院、二〇一三）、『南蛮・紅毛・唐人——一六・一七世紀の東アジア海域』（思文閣出版、二〇一三）、

『アジアの海を渡る人々——一六・一七世紀の渡海者』(上田信氏との共編、春風社、二〇二二)などを世に問うてきた。現在、海域アジア史研究は盛んだが、豊富な情報量を有する欧語史料の価値が十分に顧みられていたとは言いがたい。その意味でも、これまでポルトガル語史料を駆使して発表してきた諸論考に大幅な書き下ろし(序章、終章と本論八章分)を加えて本書が刊行された意義は大きい。

書評のお鉢が回ってきたいきさつは分からないが、評者がその任にふさわしいとは思えない。求められる書評は、欧文史料の専門家が本書の史料操作を吟味したものか、あるいは主として漢文史料を使ってきた古琉球史研究者にとつての本書の価値を示したものとということになろうが、評者はポルトガル語史料を少ししか知っているものの、著者のようにそれを使って体系的に研究してきたわけではないし、古琉球史のことはほとんど何も知らない。しかし、管見の限りでは、今のところ『南島史学』第八八号の松浦章氏によるごく簡単な紹介しかない。かなり荷が重いが、学術史的価値の高い本書の内容を評者なりに紹介してみたい。

『古琉球』(一二世紀―一七世紀初頭)研究において、大航海時代のヨーロッパ史料は「歴代宝案」が語らぬ貿易の実相に迫る可能性を有するが、これに関する日本の研究はなごらく沈滞している。戦前・戦中には、「ゴージェス」論争に見られるように研究が活発だったが、それまでだった。戦後、トメ・ピレス『東方諸国記』やフェルナン・メンデスピント『東洋遍歴記』の邦訳が出たが、それ以外のポルトガル語史料が注目されることもなければ、それらを使った海外の研究も殆ど意識されていない。

著者は、ポルトガル人の種子島来航を一五四二年とする説に対し、従来説の一五四三年が正しいとする論文を二〇〇五年に公開して以後一連の研究を発表してゆくが、当初ポルトガル語史料を直接には使っていなかった。転機となったのが、「あとがき」に述べるように、イエズス会士ゲオルグ・シュールハンマーの「一五四三年、ポルトガル人の日本発見」の再検討である。ザビエルが活動した地域について浩瀚な研究をおこなった神父による本論文は、一九四三年つまり「発見四〇〇周年」を記念して執筆が開始され(公刊は四六年。のちに彼の論文集 *Orenhaia 1963* に収録)、「ポルトガル人こそが日本を発見した最初の欧人である」(今となつては常識化しているが、当時は必ずしもそうではなかった)と主張し、発見の年次を一五四三年とするものだが、琉球に関する西洋語・アラビア語史料の記述も取り上げられている。

本書の出発点とも言えるこの論文について、著者は「史料の網羅的な紹介」であることを強調し、その結構や論旨をまとめて紹介してはいない。そこで、まずその内容を提示した上で、その後七〇年以上の研究史における本書各章の到達点を確かめることにしよう。

本論文は三部から構成される。第一部では、日本への言及(ワークワーク、ジバンクなど)ないし日本滞在の記事とされてきた西方の諸史料が逐一吟味された後、*“Léguas e Gores”* という項目が立てられて関係史料が列挙される。本項についての結論は、(一)一四六二年―一五一三年のポルトガル語史料では中国人と列挙される形でゴージェスしか出てこない。(二)一五一四年―一

五三九年の史料ではゴーレスがレキオスに変わる。(三) アラブ人の著述家はアル・グールとリキウーを同一視し、『アルブケルケ伝』(成立は一六世紀半だが、扱われるのは世紀初めの事績)の記事はそれを踏襲したものである。(四) ポルトガル人著述家の誰もゴーレスないしレキオスの位置がわかっていない。その住民はアルブケルケが一五二一年にマラッカを征服すると来なくなり、それ以後ポルトガル人は彼らとバタニ、シャム、広東で出会った。一五二七年のレキオス探査は不首尾に終わり、一五三九年まで大陸か島かも不分明だった。(五) ゴーレスとレキオスを別の存在と見なしている二人は、いずれもポルトガル人ではない。イタリヤ人エンボリの記述はリスボンで一五一五年になされたもので、まだ中国のことが知られていなかった。ちょうどこの頃にゴーレスからレキオスへの変化が起きていたが、彼は中国人の情報では「チナ人、コレア人、そして琉球の住民が区別されていない」と考えて、同じ対象を指すゴーレスとレキオスを別々の存在だと勘違いした。一方、マゼラン艦隊のトリニダード号のスペイン人は、同船したイタリヤ人からエンボリの情報を知った可能性がある。

以上の五点のほかに、イブン・マージドが紹介するジャワ人のいうリキウーは交易相手の中国人から知ったものであるとし、中国人が沖縄を大琉球、台湾を小琉球と呼ぶのは琉球の商人が台湾北部に進出したことを反映しており、琉球の島民が一五世紀に日本、朝鮮、中国、台湾、マラッカと盛んに交易していたことを指摘する。そして、ゴーレスをめぐる諸説を列挙した上で、彼自身はシャルル・アグノエルの「アラブ商人は、中国で朝鮮人と琉

球人の双方を知っていたが、彼らの母国には行ったことがないため、琉球とアル・グールすなわちコレアを取り違えたのだろう」(九三五)という説に左祖し、ポルトガル人はこの混同を承けて当初マラッカにやってくる琉球人をゴーレスと呼んでいたと結論する。

次に取り上げられるフランシスコ・ロドリゲスの草稿群に含まれるトメ・ピレス『東方諸国記』は日本でもよく知られているが、ロドリゲスが東方の海域に詳しいジャワ人の航海図に基づいて作った地図を含むアトラスの認知度は、地図学者を別とすれば低く、シュールハンマーが注目するのもやはりピレスの記述である。ピレスはのちに使節として彼が赴くことになるカントンについて記述し、またレキオスの島やジャンボンの島(「ジャパン」の初出例)にも言及している。ピレスがこれらの情報を得たのは、琉球商人と交流していたルソンのムスリム商人からであり、彼らが使ったマレー語がジャンボンという形に反映しているという。

第二部は論文のタイトルと同じ題名で、一五四三年の発見が主題である。一五四三年にフィリピンに到着したビリャロボス艦隊のエスカランテ・アルバラードの報告以下、年代順に一六三三年のロドリゲス『日本教会史』に至るまでの欧文史料、ついで後世の日本語史料が紹介される。結論部では、史料の記述と各地間の航海の所要時期からの推論を組み合わせて、シャムからポルトガル人が一五四二・四三年の二回、琉球に渡航したとし、日本渡航については、『鉄炮記』やザビエルの一五五二年の記述といった直接的証拠に、ディオゴ・デ・フレイタスやペロ・ディエスの記

述からの間接的推論を加え、四三年発見説をとる。

第三部では、「メンデス・ピントは日本の発見者か?」という問いに対して、そう主張するピントの記述の年代的矛盾を逐一指摘して、否と答える。『東洋遍歴記』は今では日本語でも読めるが、ピント関連の書簡の紹介は今なお貴重であり、本書でも一部利用されている。

原載誌では百頁以上に及ぶ大論文の大半は史料の翻刻だが、その網羅性とそれらを説明しつくそうとする姿勢が印象的である。本書はある意味でシユールハンマー論文の発展形と言ってもよいが、両者の研究姿勢にも似通うものがある。それでは、本書の紹介に移ろう。

序章 古琉球海外交流史とヨーロッパ史料

扱う時代を主に一四世紀後半以後の海洋王国時代と限定した上で、「本書のねらい」として、ヨーロッパ史料の活用のほかに、「古琉球史を東・東南アジア史の文脈だけではなく、大航海時代におけるヨーロッパ人の認識の拡大という文脈のなかに位置づけること」(二六頁)が挙げられる。

ついで、史料が概観される。まず、東アジア史料について解説されるなかで、「考古史料を活用したい」という宣明が目を引く。本書の主材料である欧語史料特にポルトガル語史料に不案内な多くの日本の読者のために、丁寧な説明が施されている。

著者は研究史を南洋史(一九三〇～四〇年代)→琉球王国史(一九八〇年代)→「東アジア海域史の全体状況のなかで、古琉球

の海外交流史を論じるアブローチの進展」(二〇〇〇年代)と時期区分するが、どうやらこの間の研究が必ずしもスムーズに接続されているわけではなさそうである。かつての南洋史研究の成果を十分に生かしながら、存在そのものは知られていなかったわけではない(少なくとも日本国外では)ポルトガル語史料に新たな光を当てたところに、本書の真面目が存する。

「第一部 世界図と東アジア」では、プトレマイオス『地理学』では曖昧な描写しかされていなかった東アジア地域がポルトガル人の探査、地図製作によって新たな相貌を表す過程がたどられる。西洋地図における日本の描写については岡本良知「十六世紀世界地図上の日本」(弘文荘、一九三八)、中村拓「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」(東洋文庫、一九六六)、岡本「十六世紀における日本地図の発達」(八木書店、一九七三)など、台湾(小琉球)については陳宗仁「Lequeu Pequeno y Formosa—十六世紀欧洲繪製的地図対台湾海域的描繪及其転変」(『台大歴史学報』四一、二〇〇八)があるが、琉球に焦点を当てたことと、ロドリゲスの地図を入念に検討したことが本部の特色である。

第1章 世界図の発達と東アジア—プトレマイオス図からカヴェリ図まで—

プトレマイオスに基づいてルネッサンス期に作られた世界図が諸発見によつて変容してゆく様を丁寧にたどった後、ジェノヴァ人ニコロ・カヴェリが一五〇五年頃に作った世界図(フランス国立図書館蔵)に注目する。

カヴェリ図は、これまで地図の西端に描かれるアメリカ大陸の

東岸の正確さが注目されてきたが、ここでは東端の北緯四五度付近に描かれる長方形のチンジリナ島が検討対象である。そこには「チンジリナは非常に豊かな島であり、(住民)はキリスト教徒である。ここからマラッカに磁器が運ばれ、ここには安息香・沈香・麝香が運ばれる」という注記がある。ポルトガル地図学史の泰斗アルマンド・コルテザンはこれを日本に比定するが、著者は交易品から見て琉球であるとし、その情報を伝えたのは琉球をアル・グールと呼ぶアラブ系航海者ではなく、マラッカで交易していたタミール系などの海商ではないかとする。この島は有名なヴァルトゼーミュラーの世界図ではジバングリとともに描かれ、その緯度は実際の沖縄に近づいている。しかし、一五二〇年代以降は姿を消す陽炎のような存在である。

交易品の記述から琉球とするのは説得的だが、「キリスト教徒」という記述が放置されているのが少しひっかかる。訛伝であるにせよ、これもタミール系などの海商が伝えたのだとしたら、そこにはどういう意味があるのだろうか。

第2章 フランシスコ・ロドリゲスの地図(二)―ポルトガルの

海域アジア進出と世界図―

一九三七年にコルテザンが発見したロドリゲスの草稿群には、ヨーロッパ製地図として初めて「レケオス」を載せた地図を含むアトラスが存在する。二〇〇八年に地図の複製と文字テキストの複製が出版され、全面的に利用が可能となったが、日本ではあまり知られていない。本章はそれを紹介すると同時に、次章の議論への導入にもなっている。

ロドリゲスは、西は紅海から東はモルッカまで広く海洋を航行した人物で、その経験がアトラスにも反映されている。本章ではその足跡を追い、地図帳全体の構成が紹介される。地図帳には二六枚の地図が収録され、既存の海図や実測による一六枚(ブラジルを含む)とジャワ人航海士の地図に基づく一〇枚に分かれる。

コルテザンは「一五一三年ごろにまとめられ、翌年本国に送られた」とするが、ジョゼ・マヌエル・ガルシアはマダガスカル描写が正確なことから、その探查結果がゴアにもたらされた一五一五年に成立したとした上で、新総督アルベルガリアがアラビヤ海の探查、中国への使節派遣、セイロンでの要塞建築を命じたことに対応するかにそれらの地図が収録されていることに注意を促している。著者は後者を「推測の域を出ないが」「一定の蓋然性をもつ」と慎重に評しているが、序章(二六頁)では「一五一五年ごろ」として、こちらを支持しているようである。

評者にはその当否もさりながら、末尾の「ロドリゲス図は(中略)トルデシリヤス条約によりポルトガルの分界に属するべき海域を包摂」し、「海域アジアの一連の地図の最後に描かれたのが琉球であった」という指摘が印象に残った。

第3章 フランシスコ・ロドリゲスの地図(二)―最初のポルト

ガル系東アジア図―

まず、モルッカ諸島を描いた地図の裏面にメモ書きされた「中国への航路」が検討され、従来の一五一三年作成説に対して、同年に中国に渡航し、翌年春にマラッカに戻ったアルヴァレスの情報に基づくのではないかという新説を立てる。同ジャンクの乗組

員はほとんど現地人であり、彼らから情報を得たとする。

次に南シナ海北部を描いた地図の「レケレオー」をディオゴ・リベイロの世界図の「レキオス」がボルネオなどに渡航する航路がある」という注記と結び付ける。琉球人がいわゆる「東洋」航路に乗り出していったことを示す材料ということになる。最後の四二葉が「レケオスの本島」図で、「小麦と銅製品」を産するという記述も琉球に符合する。しかし、島の形状自体はむしろ台湾に近いと指摘し、同時期の中国地図が台湾を単純な円形で示すのと比較して、実際に近い形状で表した現存最古の地図であると評する。そうだとすればジャワ人航海者が台湾の形状をすでに正確にとらえていたということになり、それを可能にした条件は何かという問いが導き出されよう。

ロドリゲスがその後の「世界図」に与えた影響については、一五一九年のレイネル父子の地図帳の東南アジア大陸部の描写や「中国諸島」北部の描写との類似を指摘する。このようにロドリゲス図は世界図に一定の影響を与えたものの、大半の世界図はジバンクを描き続けていた。

第4章 ジバンクとバリオコ―大航海時代初期の世界図と日本―
ピレスのジャンポンを例外として、マルコ・ポーロのジバンクと一六世紀後半のポルトガル製地図のジャバンの間には長い「断絶」がある。的場節子『ジバンクと日本』（吉川弘文館、二〇〇七）はそこに着目してジバンクはフィリピン諸島を指すとした。

本章ではまず、説が多くの点で根拠不十分として退けられ、ジバンクは日本であることを改めて確認した上で、前出のレイネ

ル父子の地図に見えるバリオコを検討する（ロドリゲスではバルボコ）。シュールハンマーも『アルプケルケ実録』に出てくるバリオコに注記を施し、著者と同じくガブリエル・フェランによってスレイマン・アル・マフリーに出てくるファリユークのことだとし、さらに「トマシエクがバリオコを沖縄本島に比定しているらしい」と付け加える。著者はこれには触れないが、ファリユーク・バリオコの語源をめぐる他の諸説を検討し、いずれも蓋然性が低いとして、そのかわりに一九一七年に藤田豊八が琉球人の最初の南洋通商の記事として紹介した『元史』の漂流民記事に出てくる「婆羅公」に注目し、これはボラクン（保良島 宮古島の東南端）からきているとする東恩納寛惇説に賛同し、ファリユークと婆羅公（*Baru*）に転訛）を結びつける。著者は「仮説」とことわっているが、他の諸説が語音の類似にしか注目していないのに対し、一三世紀後半から一四世紀前半にかけて福建沿岸と先島諸島の交易が活発化したことを示す近年の陶磁器発掘の成果を勘案している点が異なる。

「第Ⅱ部 ゴーレスとレキオス」は、戦前から活発に議論されてきた問題だが、古い革袋に新しい酒を盛っている。著者によれば、ここには語源の問題にとどまらず、琉球貿易に関する有意義なヒントが含まれているのである。

第5章 ゴーレス再考（一）―アル・ゲールとゴーレス―

まず、日本におけるゴーレス論争を振り返る。戦前から琉球説が優勢だったが、日本説も根拠があった。ピレスの邦訳がほぼ決定打となり、論争は今や過去のものになったが、史料そのものが忘

却され、呼称の由来やそれを誰がポルトガル人に伝えたかは不明のままである。その点で、著者はシュールハンマー論文の再検討の必要性を説く。

以下に紹介されるアラビア語史料のアル・グール情報については、すでにシュールハンマーがフェランの仏語訳を論文に引用しているが、著者は一九七一年のティベッツの英訳なども参照しながら、あらためて史料を紹介する。名称に関連する部分をイタリックで強調するだけのシュールハンマーに対して、「アル・グーリー鉄」への言及など、史料全体を理解しようとする。これは本書を通貫する姿勢でもある。

次に検討されるゴーレス・レキオス関係の欧文史料は、シュールハンマーより若干増補されているが、ゴーレスからレキオスへという流れ自体はすでに指摘されていることである。著者の獨自性が発揮されるのは、次章である。

第6章 ゴーレス再考 (二) — その語源問題をめぐって —

ゴーレスには別に語源をめぐる論争があり、戦前には複数の研究者が高麗説を主張したが、戦後には異説も出された。そうした中で著者がもつとも評価するのが、シュールハンマーも支持していたアグノエルである。

ピレスの「チイス(華人)とタルタル人の間にいるゴーレス」、そしてシュールハンマーも言及するエンボリの「チニ・レチ・ゴリ」のゴリが高麗に由来している可能性を指摘した上で、この高麗由来の呼称が琉球を指すようになった時期としてアグノエルは琉球が東南アジア・朝鮮間の中継交易を担った一五世紀を想定し

ているのに対し、著者はそれを一四世紀にさかのぼらせ、元代の泉州のムスリム海商が閩南音(Minnan)を聞いてグールと呼ぶようになったとする。

その背景には、一四世紀半ばに元末の混乱を避けて福建—南西諸島—九州西岸に至る南島路の重要性が高まり、高麗商人も琉球を経由して福建に渡航するようになったことがある。一方、当時「琉球」といえば台湾を指しており、台湾と福建の交流は密接であった。著者は、福建に來航した琉球人の風体は台湾人と異なり、朝鮮人に近かったために両者が区別されず、アル・グールと汎称され、元末の泉州ムスリムの虐殺、明初の高麗禁によって海商が離散したことで、アル・グール情報も拡散してイブン・マージドの記事に反映され、さらには「北東モンズーンで航行し、アル・グーリー鉄を産する」という同時代情報が増算されたと推論する。「本章での推論は、単なる表面的な発音の相似にとどまらず」「海域アジアの歴史的状況を背景として」いるので他説に比して整合的であるという著者の自負を支えるのは近年の考古学的成果だが、評者はその成果を測るものさしを持っていない。

第7章 マラッカの琉球人 (二) — 『歴代宝案』にみる —

本書で唯一漢文史料を扱った部分だが、次章の前提をなすものと位置づけられる。「歴代宝案」だけを見ればアユタヤに目が向くが、これにポルトガル史料を足せば、琉球の交易の実態を一番明らかにできるのはマラッカということになり、『歴代宝案』でも一四六〇—一五一一年に限定すれば通交回数はマラッカが一八回でトップである。マラッカへの礼物の大部分を占める青磁は、

中国からの輸出激減の代替的役割を果たした。また、一四八〇年の琉球船ベトナム漂着事件の背景には、ベトナム磁器が琉球から多く出土していることに示されるチャンバとの交易があったのだとする。

一五世紀後半に琉球と明の交易は急減するが、それ以上に東南アジア諸国の朝貢貿易は減少していた。それを補完した華人海商の密貿易により琉球の対中貿易自体が活発だったことは、陶磁器の出土状況や『海東諸国記』の記述が示しているという。この時期をローデリッヒ・ブタックは琉球交易の「福建化」と呼んでいるが、著者は、これを久米村華人の間における勢力交替、尚真王の貿易ネットワークの再編成を示すものと考え、朝貢貿易の長期動向の検討により朝貢貿易の低落を指摘した岡本弘道『琉球王国海上交渉史研究』（榕樹書林、二〇一〇）に同意しつつも、それは海外貿易全体の縮小を意味しないと。これは本書の脊梁をなす主張で、これ以後密貿易の盛行が繰り返し指摘されるが、朝貢縮小への対応が「貿易活動の国営化」を生み出したとする岡本の論点とどう切り結ぶのかが分らない。

第8章 マラッカの琉球人(二) —ポルトガル史料にみる—

ポルトガル人がマラッカを占領する前には琉球の人々は頻々とマラッカを訪れていたし、その後マラッカ以外の地では琉球人と接触していた。そうした間接・直接のポルトガル語史料を用いて、マラッカに來航していた時期の琉球人とその交易を描き出す。

ここから浮かび上がるのは、『歴代宝案』からは窺いえないマラッカと琉球の密な交流である。ポルトガル人の來航によってそ

れがなぜ断たれたのかという問いに対しては、ポルトガル人への恐れだけではなく、東アジア海域の貿易構造の変動が関係していると答える。すなわち、三浦の乱による日朝交易断絶により、胡椒などの南海商品の需要が激減する一方、ポルトガル人が広東近海に現れ、直接に胡椒を供給したため、琉球船はあえてマラッカに赴く必要はなく、パタニやシヤムに赴いたのだとする。ブタックも同様の問いを立てて解答を試みているが、彼が南海貿易の文脈でしか考えていないのに対して、本章はより大きなフレームでとらえているところに特徴がある。

「第Ⅲ部 レキオスを求めて」では、ヨーロッパ人の琉球探索の過程を追う。特にスペイン語史料を探ることで、これまで注目を集めてこなかった琉球人の「東洋」航路の開拓の様子を浮かび上がらせる。

第9章 レキオスは何処に—ポルトガル人の琉球探索と情報収集—ポルトガル人は一五一八年に琉球を探索しようとしたが、果たせなかった。広州で捕虜となったヴァスコ・カルヴォの一五三六年書簡によれば、レキオスから商船がパタニに毎年渡航し、福建からの密貿易船が琉球を訪れているという。

こうした貿易の発展を裏づけるのが、琉球諸島全域で大量に出土している一五世紀後半—一六世紀前半の粗製の青磁である。寧波事件による日明貿易の途絶は琉球の中継貿易に一層有利に働き、南シナ海におけるその商業圏は福建海商と重なっていたものの、一五三〇年代までは独自の存在感を放っていたとする。その一方で、カスターニエータの年代記の記述により、ブルネイなど「東

洋」諸国との交易が展開されたとする。「新興集散地としてのブルネイ」に着目したのは慧眼だが、当該史料にはブルネイの人々が「チナ、レケア、シヤム、マラッカ、サマトラ」などと交易している」と記すだけで、琉球の交易の規模は明らかではない。

第10章 マゼランとレキオス スペインのアジア進出と琉球認識
「マゼラン艦隊はレキオス探索も射程に入れていた」という二〇世紀初のジャン・デヌセの指摘を基点として、同艦隊以来のスペインのアジア進出事業の中に琉球を位置づける。

艦隊に参加したピガフェッタは、ミンダナオ島で毎年ルソンにレチーからの六、八隻のジャンクが来航しているとの情報を得た。著者はこれを琉球人が日本に輸出した「ルソンの布」(ビレス)と結びつけて、琉球―ルソン交易の太線を引いた後、「東洋」航路の交易の痕跡を西洋製世界図として一六世紀半ばのサンタ・クルス『世界全島総誌』に探る。そして、中国・西洋諸国との交易を担った久米村華人とは別に、「東洋」交易の担い手として福建海商や華人系琉球人の出身者を想定する。この仮説に対する琉球史研究者の応答が待たれるところである。

第11章 レキオス到達(一)——一五四二年、ポルトガル人の琉球漂

着

一九九七年に村井章介が鉄砲伝来一五四二年説を唱えてから、複数の論者がこの問題を論じていて、著者自身、村井が「前稿に對するもつとも手ごわい批判」(『日本中世界史論』岩波書店、二〇一三、二九二頁)と評するように、二〇〇五年の論考でこれに参戦しているが、日本史研究者が日本来航に焦点を合わせるのに対し、

著者は琉球へのポルトガル人・スペイン人のアプローチに着目するという視角の違いも存在する。

著者の「一五四二年に渡航したのは琉球」という所論は二〇〇九年にも再説されたが、村井は自説を撤回してはいない(前掲書所収「鉄砲伝来研究の現在」)。一方、書下ろしである本章が村井の再論をどう考えているのかが部外者には見えにくい。「これらの諸問題の総合的な再検討は他日を期し」(三五四頁)と言う著者の再論を待ちたい。しかし、評者は年次の問題よりも、一五四四年に日本に来航したスペイン人ペロ・ディアスの記事に見られるように、ポルトガル人が四二年から三年連続で琉球に到着し、四四年には琉球を足場に南九州に渡航できた前提として私貿易商人のネットワークの存在が指摘されていることに注意を引かれた。

第12章 レキオス到達(二)——琉球情報の伝播と変容

ポルトガル系世界図における琉球と日本の描写についてはやはり村井章介が取り上げており、一六世紀半ばまでの台湾・琉球・日本を含む諸島群の総称としてレキオスが本書されていることに着目して、日本は琉球に包摂されるものと認識されていたと論じた。これに対して、著者はレキオスの表記は日本に直接かかっておらず、大書は多分に装飾的な表現だとする。しかし、装飾的表現であるにせよ、大書が琉球の存在感を示していることに変わりはなく、この大書の消長が琉球の交易の消長を象徴しているのは確かだろう。

著者はこうしてポルトガル人の琉球への関心が消失してゆくのに対して、一五七〇年代以後の琉球の交易を支えたのはマニラの

スペイン人との交易だとする。しかし、この時期にマニラに琉球人が交易に来たという史料は示されていない。著者は今後のスペイン語史料の発掘に期待している(一七頁)。このテーマに関する一六世紀のポルトガル語史料が現在ではほぼ活字化され、それらを本書が縦横無尽に利用する環境にあるのに対して、スペイン語の未刊史料にはまだ発掘の余地が残っているのかもしれないが、スペイン人のフィリピン進出初期の史料を少し触った経験からすると、琉球についてはあまり期待できない気がする。それが見込み違いであればよいと思う。なお、六節「アルメニオ」島と金銀島伝承」については、増補改訂版が前掲の上田信氏との共編本に収められているので、参考されたい。

終章 大航海時代の琉球王国

本書の内容を振り返った後、「古琉球期海上貿易の長期的傾向」として、ブタツクの五つの時期区分に対して、七期区分を提示する。朝貢貿易を基準とした時期区分であれば、一五世紀前半がピークということになる。ブタツクは密貿易というファクターを入れて衰退が起きたのは一五四〇年以降とするが、著者は東洋航路の開拓により、琉球の交易の活力はそれより継続したとする。さらに、貿易陶磁の流れによって所説を補強し、最後に東南アジアの「港市国家」との類似性を指摘する。しかし、琉球史は東南アジア史の文脈で理解すべきだというのではなく、さりとて日本史の一分枝でもなく、環東シナ海域としての「東アジア海域」という枠組だけでも論じえないと言う。東アジア海域史でこれまで目覚ましい成果を挙げてきた著者の言だけに説得力がある。

言い訳めくが、本書の豊富な内容をこれだけの紙幅で十分に紹介することは難しい。その魅力を知るにはこの大著にじかに取り組むしかないが、そうした読者への教育的配慮が周到に施されていることも付言しておきたい。一〇〇頁に及ぶ注の存在もそれを示している。また、全体的な結構も見事なもので、整然とした伽藍を彷彿させる。

本書は「沖縄タイムス出版文化賞」について「アジア・太平洋賞特別賞」そして「日経・経済図書文化賞」を受賞し、増刷もされた(初刷・増刷の正誤表は<https://www.shinbunkaku.co.jp/shuppan/seigohyo/9784784219896.pdf>で見ることができ)。当然の評価だと思うが、何といっても望まれるのは、本書に対する琉球史研究者の応答である。本書が重視する私貿易セクターと着眼した「東洋」航路開拓の問題は交易のみならず、王権の構造そのものにもかかわるからである。

(思文閣出版 二〇二〇・八刊 A5 六三〇頁 九五〇〇円)